

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「準動詞に関する通言語学的研究」（2014年度第1回研究会）

Title: Cross-linguistic Research on “Verbals” (The 4th meeting)

日時：2014年6月14日（土曜日）10:30-17:30

Date/Time: 14 Jun 2014 (Sat.) 10:30-17:30

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

Venue: Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA

Language: Japanese

1. 梅谷博之 (AA 研共同研究員 / 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

「モンゴル語の副動詞：「副動詞語尾」と「形動詞＋格接辞」の関係」

モンゴル語の副動詞語尾に関する先行研究を見ると、ある接辞が、一部の先行研究では副動詞語尾として記述されているのに、別の先行研究では「形動詞語尾と格接辞の組み合わせ」として分析されている場合がある。本発表ではそのような形式を取り上げ、並置表現（例：大雪が降ったら、あるいは大嵐が来たら、お宅のこの建物は崩壊するかもしれませんよ）を観察することで、どちらの記述が妥当であるかを検討した。その結果、*-xaar*「～すると」、*-xaar*「～する為に」、*-xad*「～する時」は、「形動詞語尾と格接辞の組み合わせ」として分析するのが妥当であることが分かった。

次に、「副動詞」という用語について、一般的な使い方とは別の用法を一つの可能性として提示した。従来のモンゴル語研究においては、動詞語幹に副動詞語尾が一つ付いたものを「副動詞」と呼んでおり、動詞語幹に形動詞語尾と格接辞が付いたものは、副動詞と同等の機能を果たす場合であっても、「副動詞」と呼ばれない。ここには、「動詞語幹＋単一の屈折接辞」という内部構造を有する語形に限定して「副動詞」という名称を用いる考えが見受けられる。しかし、語幹に二つ以上の屈折接辞が付く場合もありうる。すなわち、「動詞語幹＋形動詞語尾＋格接辞」を動詞の一語形として見ることも可能である。この場合、「副動詞の内部には屈折接辞は一つだけ現れる」という考え方に拘らなければ、「動詞語幹＋形動詞語尾＋格接辞」の構造を持ち、かつ述語修飾機能を有する語形を、「副動詞」と呼ぶことも可能である。

2. 蝦名大助 (AA 研共同研究員 / 神戸夙川学院大学)

「クスコ・ケチュア語の準動詞：名詞化の問題を中心に」

ケチュア諸語では、準動詞にあたるものに2種類ある。先行研究では一般にこれらは副詞化形 (adverbialized verb, adverbialized form) および名詞化形 (nominalized verb, nominalized form) と呼ばれる。本発表では、ケチュア諸語のひとつであるクスコ・ケチ

ェア語について、定動詞、副詞化形、名詞化形の形態統語的振る舞いの違いについて述べたあと、特に名詞化形の問題に焦点をあてて述べた。

ケチュア諸語の名詞化は、いわゆる“transpositional inflection”（品詞転換を伴う屈折）とみることができる。しかし、同じ名詞化接尾辞が、道具や行為者など、具体的な指示対象を表す場合にも用いられる（concrete nominalization）という問題がある。先行研究では、この concrete nominalization を派生とみるものがある。しかし、生産性・意味的な規則性や、統語的な振る舞いからみて、派生とは言いにくい。一方で、一様に屈折と見るにも問題がある。形態論の理論には、屈折と派生が明確に2つに分けられる（dichotomy）と見る立場と、連続的（continuum）と見る立場とがある。ケチュア諸語の名詞化は、後者の立場を支持する例であるといえるのではないだろうか。

3. 下地理則 (AA 研共同研究員 / 九州大学)

「南琉球語伊良部島方言の準動詞」

本発表では、南琉球語宮古伊良部島方言の動詞屈折形態論を概観したうえで、特に副動詞について詳しく記述および問題提起を行った。副動詞は、類型論的には副詞節を作る準動詞とされる。すなわち、①埋め込み節（副詞として）であり、②テンスやモダリティなどを標示しない、ということが副動詞の類型的特徴であるとされる。ところが、琉球語や日本語、その他アジアの諸言語（さらにはアジアを超えてニューギニアや南米まで）において、②の点では確かに準動詞的だが①の点では等位節的に働くような動詞形式が豊富にある。しかも、同じ形式がより副詞節的（①の特徴を満たす）にもより等位節的にもなることがよくある。よって、等位接続と従位接続という二分法そのものが、実は欧米の言語によりかかった区分であり、その区分をもとにしている限り、いわゆる「アジア型の副動詞」(Bickel 1998)はうまく記述できない。本発表では、そもそも副動詞を接続して定動詞で終止するという構造（節連鎖構造）をもつ言語と、接続詞と定動詞の組み合わせで節をつなげていく言語（印欧語）の区別がより重要であり、等位接続と従位接続の区別は後者の言語にのみ有効ではないかという主張を行った。

※上記のほか、本研究課題の成果刊行について意見交換をおこなった。